

「表現の生態系」展とあなたをぐっと近づけるキーワード

1 | 白川昌生

白川さんは、ルドルフ・シュタイナーの人智学に通じる精神を、近代以降に起こった日本の宗教の流れに見出しています。出口王仁三郎と出口なおが始めた大本教は、上毛三山（赤城山・榛名山・妙義山）とも縁が深くありました。日本（群馬）とヨーロッパでそれぞれ起こっていた宗教や芸術の精神性が、国境や時代を超え、近代の急激な変化から人々を救う役割を担うという共通点があったのは、とても興味深くありませんか？

2 | 糸井 潤

人々の信仰の場所だった山や森の奥深い場所。糸井さんはそれらを巡り撮影を続け、その写真には、見えない祈りにより積み重なった長い歴史がとらえられています。そこに差し込んでいくかすかな光。あなたにはどのように見えるでしょうか。人間は、自然の中に包み込まれるようなところに生と死、外と内の境界のような祈りの場所をつくってきました。

3 | 鴻池朋子

「一匹の動物として多くのセンサーを使ってものづくりをしている作家たち。そして観客も視覚だけでなく様々な身体機能を使って鑑賞しているはず。」という鴻池さん。その壁画や毛皮を使った作品は、触覚や嗅覚でもとらえることができ、それによって自然や生き物のエネルギーが接近し、私たちが抱いている世界を大きく揺さぶります。

4 | 地主麻衣子

人は生まれ育った環境や貧富の差に関係なく老いていき、最期を迎えます。ただ日々の忙しさの中で、老いや死を見つめる機会は決して多いわけではありません。地主さんは、マンション型霊園に興味がある、という母親の言葉に驚き、埋葬の仕方を調べる旅に出かけます。そこで見てきたのは、民族や宗教の違い、家族と個人の関係、またそれだけでなく、ひとり一人の人生でした。お墓は個人と社会の関係を大きく反映した存在なのです。

5 | 尾花賢一 + 石倉敏明

関東平野の北で美しい裾野を広げる赤城山は昔から山岳信仰の対象であり、多くの伝説が残されています。また、豊かな自然の恵みをもたらすだけでなく、任侠として知られる国定忠治も拠点とし、現代でも暴走族などのアウトローを惹きつけてきました。日常と非日常が曖昧で境界的なアジール（「聖域」「自由領域」「無縁所」）として、赤城山を描き出します。

6 | あかたちかこ + ハレルワ

ひとりの小さな声が重なり合う経験をしたことがありますか？ パレードやデモは、これまでひとりのものだった問題をみんなで共有し、それまで関係がなかった人にも伝えていく方法です。家や会社ではなく、路上で表現すると解放される気持ちにもなるかもしれません。ここにはすぐに参加できるペンや段ボールが用意されています。どんな声も大切な一言ですよ。あなたの声をぜひ聞かせてください。

7 | ブブ・ド・ラ・マドレーヌ

人魚のお話は世界中のいろんなところに伝えられています。その姿や大きさや性別は様々です。ブブさんは、「ある島は一匹の大きな人魚の体であり、人魚は脱皮するかもしれない」と考えました。その島は誰のものでしょうか。また、人魚の皮は皮膚でもあり、島の表面の山や川でもあります。脱皮された人魚のウロコやヒレは、形を変えて新しい場所に流れていったり飛んでいたりします。

8 | 中村裕太

ブルーノ・タウトは、1934年に高崎の少林山達磨寺に滞在し、井上房一郎と工芸品のデザインを行い、東京銀座に工芸品店「ミラテス」を開きます。一方で、東宮稔は、1949年頃に前橋の赤城山麓に「赤城工芸所」を開き、玩具をはじめとした工芸品を製作しました。手仕事が増加されていく過渡期に二人が理想とした工芸とは何だったのでしょうか。タウトのデッサンと東宮の工芸品の間に「群馬工芸の生態系」を中村さんが新たな視点で見つめなおします。

9 | 三輪途道

三輪さんは古来の木造彫刻の技法を用い、表面に独自の彩色を施しています。お面は高崎の伝統的なお祭りで使用されるために制作されました。現代の作家がつくる木彫作品と、地域の文化財を私たちは区別してしまいがちですが、そこにはどんな違いがあると考えべきでしょうか。近年、三輪さんは「自分自身を表現するのではなく、彫られるものに寄り添うだけで、彫るべき形に導かれる」といいます。さて、三輪さんによって魂を吹きこまれた猫たちは、どのような気持ちでそこに佇んでいるのでしょう。

10 | 川瀬 慈

旅芸人と聞くとどんなイメージを思い浮かべますか？ 群馬県川場村では、旅芸人一家に扮して家々を巡り、歌や踊りを披露する「春駒」という伝統行事があります。また遠く離れたエチオピアには、町を移動しながら、家の玄関で祝福の歌を唄う集団「ラリベロッチ」がいます。今も昔も日常の風景の一つとなっている人々の営みを記録した映像が、個人と家族、家族と地域、そして地域と世界の関係へと私たちの想像を広げます。

「表現の生態系」を理解するための指標

Worlding （世界化）	・ネルソン・グットマン（菅野盾樹訳）『世界制作の方法』筑摩書房、2008年 ・モリス・バーマン（柴田元幸訳）『デカルトからベイトソンへ―世界の再魔術化』国文社、1989年 ・ダナ・ハラウェイ（高橋さきの訳）『犬と人が出会うとき―異種協働のポリティクス』青土社、2013年
時 層	・ブルーノ・ラトゥール（川村久美子訳）『虚構の「近代」―科学人類学は警告する』新評論、2008年 ・ルーシー・リッパード、 <i>Overlay: Contemporary Art and Art of Prehistory</i> （末訳）、New York: Pantheon Books, 1983.
メッシュワーク	・ティム・インゴルド（金子遊、水野友美子、小林耕二訳）『メイキング―人類学・考古学・芸術・建築』左右社、2017年 ・保刈実『ラディカル・オーラル・ヒストリー―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店、2018年

*表現の森

